

平成27年度 第1回豊橋市総合教育会議議事録要旨

平成27年5月14日 開催

豊橋市教育委員会

| 第 1 回 総合教育会議 | |
|---------------------|--|
| 日時 | 平成 27 年 5 月 14 日（木）午後 3 時～5 時 |
| 場所 | 市役所西館 7 階第 1 会議室 |
| 構成員 | 佐原 光一 市長、木下 治 教育委員長、 朝倉 由美子 教育委員長職務代理者、芳賀 亜希子 教育委員、 高橋 豊彦 教育委員、加藤 正俊 教育長 |
| 事務局 | 加藤 喜康 教育部長、金子 尚央 教育部次長、 村田 敬三 教育政策課長、山西 正泰 学校教育課長、 中田 浩次 教育政策課主幹、守田 雅一 学校教育課主幹 ほか全 12 名 |
| その他 | 傍聴人 1 人、記者 1 人 |

議 事 日 程

市長あいさつ

協議事項

- 1 豊橋市総合教育会議設置要綱について
- 2 教育の大綱及び豊橋市教育振興基本計画の策定について
- 3 個別案件について
「学力・体力の向上について」
- 4 今後の協議事項について

連絡事項

- ・次回開催日程

市長あいさつ

平成27年4月1日の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正に伴い、新教育委員会制度がスタートし、総合教育会議の設置が地方自治体の首長に義務付けられた。

総合教育会議が設置されたことで、市長と教育委員会が教育について協議・調整を公式の場で行えるようになった。

今年は特に、地方創生と言われている中で、少子化・高齢化への対応が求められている。少子化の中にあっても、豊橋市でこの子を育てて良かったな、たくさん子どもを育てて幸せだったなと思える社会にしていきたいと思っている。その中で教育は、とても大切な役割を担う。教育は、地方創生を考える中で欠くことができないテーマである。地域の特色ある発展や地域の人たちの幸せの生活基盤づくりのためにも教育を考えていきたい。

子ども達にとって幸せな教育とは何かという原点に戻って、体力問題、学力問題、コミュニケーション能力の問題等々を解決するために学校だけでなく、家庭も巻き込んで教育を進めていきたいと思っており、そのようなことを議論する場としていきたい。

協議事項

1 豊橋市総合教育会議設置要綱について

■教育政策課長 協議事項第1号について説明（別添資料）

（高橋委員）

「児童、生徒等の生命又は身体に現に被害が生じ、又はまさに被害が生ずるおそれがあると見込まれる場合等の緊急の場合に講ずべき措置に関する協議」について、全員を招集するのか。

（事務局）

緊急の場合は、市長と教育長のみで会議を開くことができるが、基本は速やかに全委員に連絡し、全員が参集できなくても直ちに開催することとなる。その後、全委員に報告する場を持つ。

・全員の賛同をいただき、要綱に基づいて総合教育会議を行うことと附則に本日の日付を入れることを確認。

2 教育の大綱及び豊橋市教育振興基本計画の策定について

■教育政策課長 協議事項第2号について説明（別添資料）

（市長）

本市では、平成23年に10カ年を計画期間とする豊橋市教育振興基本計画を策定しており、5年目に当たる本年度は中間見直しの時期となっている。

（高橋委員）

前期計画の総括・分析が出てスタートするのか。豊橋市教育振興基本計画後期計画策定会議と総合教育会議とのやり取りはあるのか。

（事務局）

8月の福祉教育委員会（議会）には前期5年間の中間総括したものと後期5年間の方向性をまとめたものを提出していきたい。7月下旬に第2回目の総合教育会議を予定しているので、資料を事前にお届けし、総括と後期の方向性に対する意見をいただきたい。

また、その後も教育振興基本計画策定会議での話し合いの情報を随時お伝えし、意見をいただきながら進めていきたい。

（高橋委員）

かなりタイトなスケジュールである。

（教育長）

総合教育会議の設定が、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」で位置づけられた。公選された首長が、教育分野についてオフィシャルな場で執行機関である教育委員会と協議・調整する場が保障された。教育行政は教育委員会だけでやれるという時代ではなくなっており、市長部局との連携協働体制が、必要となっている。そして、教育行政をどういう形で街づくりの中で進めていくかということが大事。これまでも予算に関する権限は、市長が持っていた。今後は、政策も含めて協議することができるので、こういう公式な場ができたことは素晴らしいと思っている。教育振興基本計画でも何を目指し、何をやるかという戦略がないと行政はできないので、総合計画と教育振興基本計画の中間見直しと期を同じにしてやっていきたいと考えている。

ところで、市民にも公開することになる大綱のイメージをどうとらえたらよいか。

（市長）

市の最上位の大きな柱である豊橋市総合計画の下に豊橋市教育振興基本計画がある。その内容と教育の大綱とが異なることはあり得ないので、教育の大綱は豊橋市教育振興基本計画の概要版のような形になる。

その際に、教育の大綱は、図や学校などの出来事をイラストとして入れたり、言葉を平易なものにしたりすることにより、豊橋市ではこんな子どもに育て欲しいなどの気持ちや、市民に伝わりやすい形にしたい。

（委員長）

大綱というと大げさに聞こえるが、理念である。

(教育長)

事務局の提示したタイムスケジュールの中に、また新たなものを作るというイメージを持つとさらにタイトなものとなり、できないと思う。だから、教育振興基本計画の見直し、改定を進めていく一方で、大綱は、教育振興基本計画の概要版というようなイメージを持ちながら進めていき、最後にその整理ができればよいという感じということか。

(市長)

そうである。

教育の大綱を豊橋市教育振興計画の教育の方向性、基本施策と整合を図り、一致させて今年度中に作成することにしたい。

3 個別案件について

「学力・体力の向上について」

(市長)

私からテーマを一つ持たせていただいた。

愛知県の学力・体力は全国的にみて、決して満足のいく結果となっていない。しかし、そのことに対する議論が教育委員会側で高まっている印象を受けないが、みなさんはどのように考えているか知りたい。また、どのように対応をしていくと良いのかの話し合いを進めていきたい。

(市長)

NHKの特集で福井県を取り上げていた。学力・体力の向上のために課題の解消方法などを全県的に共有しながら取り組んでいる。宿題の多さは圧倒的であるが、三世代家庭が多いことからか、家で宿題の添削までやる仕組みができています。中学校の数学では教員が学年をまたいで生徒を受け持ち、縦軸でつまずきやすい個所などの状況を把握している。

また、外国人の学習支援について、現在、豊橋市の外国人は日本生まれのブラジル人が中心となってきているので、日本語が話せない者は減ってきているが、まだ多くいる。そして、隣の浜松市では夜間中学に近い形で外国人の中学生の学習支援をしている。かつて豊橋市は浜松市より不登校率が低かったが、今は浜松市より高くなっているため、浜松市に比べて取り組みが遅れてきていると感じられる。

学力・体力は学校で身につけさせたい。特に、学力はコミュニケーション力が大切だが、その意味で国語Bの成績が悪いのがとても気になる。

(委員長)

大学受験と同じで過去問をやれば点が上がるという意見もあるが、そういうテクニックで評価を上げるという問題ではない。

ここには平均点で出ているが、成績のばらつきについてどのように分析しているか。

(事務局)

結果は平均点で出ているが、学力は正規分布をしており、その山が左に寄っている。体力は二つの山が種目によってできている。最多出現率のピークは、ちょっと低い位置にあり、問題である。

(高橋委員)

豊小学校では、縄跳びが非常に盛んであるため、入学式で上級生が縄跳びの演技を見せる。

一つ何か特技とか特徴があり、ここに行くところが上手になるということがあると、このことをきっかけとして、総合的に体を使うようになり、体力が高まるということの間近な豊小学校で見てきた。

そのような学校風土は、きっかけとして大事で、好きになるかならないかの最初のきっかけづくりも大事であると思う。

(市長)

授業の合間の少し長い休み時間に縄跳びや外で鬼ごっこをやって、昔に比べて少なくなった体育の時間を補っている。

(高橋委員)

体力のためでなく、「楽しさ」、「一緒に楽しむ」という経験から体を動かすきっかけを作ることが必要。評価するからやらなければならないとなると、苦手な子はますます嫌いになる。中学校へ進むと取り返しがつかない。

(市長)

小学校低学年で基礎的なことをやらせたいし、やれる環境が必要である。

(高橋委員)

ただ、今は公園では野球がやれない、これはダメあれもダメというのがすごく多く、子どもたちにとって窮屈な環境になっている。

(委員長)

そしてワンパクな子も少なくなった。

(教育長)

福井市と豊橋市と比べてスポーツ環境はどこが違うのか。

(高橋委員)

福井を始め北陸は、暮らしやすい県の上位を占めている。三世代同居の比率が多く、その風土の中で家庭内のしつけも含め残っている。勉強もおじいちゃんおばあちゃんが見てくれている。

(市長)

コマツという会社がありますが、コマツは、本社機能の多くを東京から石川県に移した。東京本社では0.7だった女性社員の出生率が、石川県に転勤した世帯では、三世代同居でなくても1.9に近くなった。その理由を聞くと、石川県に転勤した会社員からは、居心地がいい、子育てがしやすい、コミュニティがしっかりしていて子どもを産

みやすい環境であるという声が多かったとのことであった。

(教育長)

まさに、教育振興基本計画で我々が目指しているものと同じではある。社会構造、生活様式が変わってきている現代社会で、地域ぐるみの教育システムの取り組みなどをきちっとすることを標榜して進めてきているが、もう少し強固に推し進める必要がある。

(市長)

いくつかの実験をする必要がある。

前芝で校区市民館に祖父・祖母も集まることで自動的に三世代の環境ができ刺激とする取り組みを考えている。子どもを育てるのに安心できる環境ができ、学力だけでなく世の中に適応能力が高い子を育てるなど、いろいろ試したい。

(教育長)

私は今、もう一つの大きな課題として考えていることがある。子どもの体験量に格差ができていて、それは親の経済格差に比例しているということである。体験をお金で買う時代となっている。行ける子と行けない子、お稽古ごとをできる子とできない子に対して行政の仕掛けが必要。

(市長)

理科好きは発明クラブへ、音楽好きは少年少女合唱団へ参加という働きかけをしているが、あれは特殊なものという意識がまだある。

(高橋委員)

まだ身近なものとなっていない。

(朝倉委員)

広げていくためには、子どもが自分で行ける地域に分散していないと不可能で、子どもが自分で行ける距離にないと結局選ばれた子とか、連れて行ってもらえる子しか行けない。

(市長)

通うツールについては、市が支援することなどは考えられる。総合スポーツクラブへの参加も含めてバスのパスポートなどの支援のしくみも考えられる。

(教育長)

学校教育でできることと地域社会でできることを分けて考えることも必要。

(教育長)

特別なことをやるのではなく、当たり前のことを地道に続けるために学校教育と地域社会の中で何とかカバーしていきたい。

(市長)

家庭で地道にやることを学校に預けてしまう傾向はないか。

(教育長)

家庭教育といっても当事者の親に言っても難しいので、地域の子どもという目で面倒

をみる環境が必要。

(高橋委員)

都市部では児童クラブとの中間的な形で企業がかかわり、宿題も何もかも見るという動きも出ている。公教育を否定的に見るといふ動きが、マーケットを生み出していることは問題。だから、先行して地域で、地域力でどうするかという観点も必要。

(朝倉委員)

人づくりがどこかに行って、成績や結果ありきとなつてはいけない。

子どもがやりたい、もう少し頑張りたいということには親も協力するのではないか。

(委員長)

全部を一度にやるのは難しいが、原点は学校であるので、児童クラブも含め学校にいる間はまず何をやるかを考える。それができて地域の方へ持っていけないのではないか。

(市長)

学力も原点は学校。問題なのは基礎のところ、しっかり身につかない子どもを学校の通常の時間の中で全部面倒をみるのは、今の授業時間数などを考えるととても困難を伴うと思うが、どうか。

(教育長)

体力面について、小学校6年生は10月までに球技大会などがあるが、それで行事が終わってしまい、中学校に入れば部活動が始まる。その下半期の空白を埋めるため仕掛けとしての駅伝大会を作った。かつては耐寒訓練、耐寒マラソンの成果を学年のマラソン大会につなげていた。さらに学校代表の競技会として8年前に駅伝大会を催した。走ることは体づくりの基本なので、期待をしているが、なぜかその成果が表れていないように感じる。

(市長)

全体を考えると成績低位の子をどう底上げするかも課題である。走りたくない子、動きたくない子への働きかけ・仕掛け作りにみんなで知恵を出し合いたい。国語・算数では外国人だけでなく、日本人の成績低位の子どもへの働きかけも大事である。

下位層の子どもたちは、分きたいけど分からない。親が教えてくれるわけでもなく、塾へも行けない。昔はできる子に面倒を見させたこともあって、それが当たり前だった。

(朝倉委員)

今は保護者からなぜうちの子にやらせるのかと苦情が来ることもある。

(高橋委員)

習い事の多さから子ども同士をセパレートしている。昔は子どものことは、子ども同士で解決していた。習い事も企業でなく、近所のおじさんやおばさんがしていた。

(芳賀委員)

差がすごい。優秀な人たちはすごいが、さっき言った下位層の子たちが何かやるといっても結局できない。家がそういう環境にない。そんなことやってないでこっちを手伝いなさいと言われる子がいっぱいいる。

児童クラブ的な、子どもが子どもらしく生活できるような居場所の確保があると変わると思う。また、小学校3年生くらいで分かりたいけど自分の力では、分からない子どもがいる。だから、学校の授業だけでは理解できない子どもは、誰かにあと少し教えてもらえるとやれるようになることもあるので、教えてもらえる場があると、下でくすぶっている子がぐっと上がると思う。

(教育長)

植田小学校では、地域の中でボランティアが活動をしてきている。教員OBもいて夏休みなどに、宿題を見たり定着が遅れた子たちの面倒を見ている。

(市長)

完全ボランティアは難しいので、シルバー人材センターの中にそんな部会を作る方法もある。例えば夏休みに冷房が利いていて、劣等感を持たずに参加できる場所を提供すれば子どもは喜んで参加すると思う。

(高橋委員)

今は親が指導できず、若年層も何をやれという指示がないとやれない。

(教育長)

大清水にミナクルができて、実験的なこと、いろいろな体験の場をやることできると考えており、始めていきたいと思う。

(市長)

羽根井小学校が、いろいろなことをやっているがその効果はどうか。

(教育長)

分析をしていくと、少人数指導には効果がある。自然発生的に少人数学級になっている小学校もあるが。

(市長)

外国人の子どもコミュニティに入って欲しい。社会で生きるには必要であることを家族に理解してもらう必要がある。日本語を改善することで劇的に変わる。市高に通うことによって、不登校の子どもが劇的に変わっている事例もある。

(朝倉委員)

今、新聞を取っていない家庭もかなりあり、読む力が足りない。

(市長)

長い文章を読み切る力が落ちている。

(教育長)

平成29年にNIEの全国大会が名古屋である。読み解く力をつけることも必要。

(市長)

小学校が52校もあると、良い実践を行っていても他の学校へなかなか伝わりにくい。
(市長)

福井や秋田に視察に行ってもらって、具体的な政策を学んで欲しい。8月にサマーレビューがあり、こんなことをするとこんな風になるといった提案をして欲しい。

昨年、タブレットを嵩山小学校と牛川小学校に導入したということもある。今後は、電子教科書が中教審でも話題になっているため、教科書の媒体についても考える必要がある。

(高橋委員)

タブレットの使用は、文章を読み込む力の育成を考えながら慎重に議論をお願いしたい。

(教育長)

牛川小学校の授業を見学して、これからの授業観・指導観が変わると感じた。一人ひとりの進捗度合いを瞬時に把握できることで、机間巡視をしながら狙い撃ちで指導をすることができ、生徒との距離を近付けることが容易になる。

(市長)

学力・体力ともに低位にいる子どもたちに目を向け、底上げを図る必要があり、そのために今日行った協議を参考にしながら次回以降どのような手法で進めていくかの話し合いを行いたい。

4 今後の協議事項について

(市長)

今回は、予算に向けて「学力・体力の向上について」を引き続き協議する。また、「学校施設の在り方」「小規模校の対応方法」などを3回目以降に取り上げたい。

連絡事項

- ・ 次回開催日程

平成27年7月29日(水) 午後3時から市役所西館8階第3委員会室